

日本語におけるモーラの鼻音の特徴*

桑本裕二

キーワード: モーラの鼻音、略語、愛称形、短母音化、音節の重さ

0. はじめに

本研究は、日本語に存在するいわゆる「撥音」、つまり音節末にあってモーラを伴う鼻音（モーラの鼻音）の音韻的特徴を明らかにし、特に、他の促音、長音といった特殊拍との比較を通じて様々な音韻現象を検討するものである。特に興味深いことは、促音が後続音節の onset の二重子音の一部として、長音が当該音節の短母音の代償延長として扱われるなど、隣接分節音と何らかの関わりがあるのに対し、撥音の場合は、後続鼻音の代償延長などは別にしても、周囲の環境に関わらず単独で挿入される場合が、いろいろな現象の中に存在するという点である。また、これとは逆に、2モーラ音節の後部要素として、促音、長音の場合と比較すると、明らかに脱落しにくいことを示す例が多く存在する。また、略語形成の場合などに、このモーラの鼻音を含む音節が、略語を形成する他の条件にも関わらず、音節構造が損なわれることなく積極的に出力に現れるなどの特徴がある。

これらの例は、略語形成、名前の愛称形、強調的副詞、漢字語の口語形などに頻繁に見られるが、音節、モーラなどとともに、これらの上位範疇であるフットの構造にも注目しながら、2モーラ音節のなかでもモーラの鼻音を含むものがより安定していることを示す。

本論文の構成は以下の通りである。第1節で、様々な略語形成とモーラの鼻音の安定性を示す。第2節で、名前の愛称形に積極的に用いられるモーラの鼻音の例を、第3節で強調的副詞の浮遊モーラとしてのモーラの鼻音の例を示す。第4節は、大和言葉に比べて音韻交替を受けにくいとされる漢字語のモーラの鼻音の音韻交替を示す。第5節で全体をまとめ、加えて今後の課題について考える。

1. 略語形成

1.1. 複合語略語

2つ（あるいはそれ以上）の要素からなる複合語からの略語形成は、通常、ラジオ・カセット => ラジカセ、ファミリー・レストラン => ファミレス のように、それぞれの要素のはじめから2モーラ目までがフットを形成して全体で4モーラ2フットにするものが最も一般的である。この一方で、略語形に実現すべき各要素のフットが、長音、促音を含む場合はこの形が保たれない場合が多い。長音の例を(1)に、促音の例を(2)に示すが、それぞれ、aは長音（の第2モーラ）、促音を無視して3モーラ目を含んで全体で foot binarity を

- (4) zeneraru + koNtorakutaa => [zene][koN]/ *[zene][koto]/ *[zene]ko
 jiiNzu + paNtsu => [jii][paN]/ *[jii]pa/ *[jii][patsu]
 poketto + moNsutaa => [poke][moN]/ *[poke]mo/ *[poke][mosu]
 baNdo + masutaa => [baN][masu]/ *ba[masu]/ *[bado][masu]
 raNdo + kuruuzaa => [raN][kuru]/ *ra[kuru]/ *[rado][kuru]

一方、(5)のように、長音、促音、撥音以外の要素が回避されて、2モーラフット+1モーラで略語形成がなされているものがある。これらの例の存在は、逆に、回避されることのないモーラの鼻音が、音節の構成要素としてより安定したものであることを裏付けることにもなる。

- (5) roiyaru + hosuto => [roi]ho/ *[roi][hosu]
 rabu + hoteru => [rabu]ho/ *[rabu][hote]
 ero + bideo => [ero]bi/ *[ero][bide]
 akoosutikku + gitaa => [ako]gi/ *[ako][gita]

1.2. 略語形成とモーラの鼻音を含む音節の保持

1.2.1. 超重音節の回避とモーラの鼻音

1.1. で扱ったように、複合語略語形成の原則は一つの要素につき2モーラをとるというものであるため、/aiN/, /auN/ などを含む超重音節で始まる語が略語形成に関わる場合、2モーラフットが形成されるためには、このうちのいずれかの要素が失われなければならない。(6a)は原則的に前から2モーラを取る場合、(6b)は母音要素を一部回避して、モーラの鼻音が現れる場合である (Kubozono to appear, 桑本 1998b)。

- (6) a. doNto + maiNdo => doNmai
 naiNtii + naiN => nainai (cf. dauN + tauN => *dautau)
 joiNto + beNchaa => joibeN
 b. buruu + mauNteN => burumaN/ *burumau
 noo + kauNto => nookaN/ *nookau
 sauNdo + torakku => saNtora / *sautora
 tsuu + dauN => tsuudaN/ *tsuudau
 meiN + sutoriito => meNsuto/ *meisuto

(6b)にみられる母音要素の回避は、上に述べた対応理論に基づけば、入力での音節の端(右)と、出力のフットの端(右)との一致に関する制約 (Align-R, see Suzuki 1995) に

よって説明される。つまり、これら2つの端が一致している場合は、一致していない場合よりも最適であると考えられる。よって、モーラの鼻音が現れる方が適していることになる。そしてこのことは、モーラの鼻音で終わる音節が安定したものだとみなしうる一つの理由であるといえる。この一方で、(6a)のようにこの Align 制約に違反するのは、Kubozono (to appear) が指摘しているように、二重母音 /au/ の有標性が /ai/ にまさっているために /au/ の方が音韻交替を受けやすいということによっている⁹⁾。

1.2.2. CVN の場合

CVN 型の2モーラ音節の場合、たとえば CVCVN- で始まる語の略語形成において、複合語、単一語を問わず、[CVCV]N- のように語頭から2モーラをとってフットが形成されることは少ない。

- (7) a. remoN + sukasshu => resuka/ *remosuka
 modaN + booi => mobo/ *modaboo/ *modabo
 b. sebuN + sutaa => sesuta/ setta/ buNta/ *sebusuta
 mairudo + sebuN => maise/ maiseN⁽⁶⁾ / *maisebu
 nihoNshu => poNshu/ *nihoshu/ *nichishu⁽⁶⁾

(7a)は2音節目がモーラの鼻音を含む2モーラ音節であるため、はじめから2モーラ目までをフットとすると、(6b)と同様、Align 制約に違反することになる。この違反を避けるため、この音節を含まないで1モーラだけをとって略語が形成される。(7b)はさらに興味深い例で、sesuta などのようにモーラの鼻音を含む音節（この場合 buN）をまったく無視した略語となるか、buNta, poNshu のように、語頭になくてもモーラの鼻音を含む音節だけをとって略語となるか、どちらかとなり、いずれの場合も出力と入力ではモーラの鼻音をもつ音節の構造は損なわれないことになる。交替を受けにくいということは、それだけ安定度も高いということになる。

その他の特殊拍（長音、促音）の場合は、CV型の単音節に容易に交替する。

- (8) a. kamera + rihaasaru => kameriha
 pawaa + suteariNgu => pawasute
 animeeshoN => anime
 iNfureeshoN => iNfure
 b. iNtaa + karejji => iNkare
 basukettobooru => basuke
 burakku + koNteNporarii => burakoN

しかしながら、略語形成に際して、モーラの鼻音を含む音節の構造が損なわれる場合が若干ある。

- (9) demoNsutoreeshoN => demo/ *demoN
 gyaraNtii => gyara/ *gyaraN

これは、最小語の韻律条件に関わって、de.moN = LH (L=light, H=heavy) の構造が許容されないためである (Itô 1990: 217ff.)。

複合語略語の場合にモーラの鼻音を含む音節の構造が損なわれるのは、かなり数が限られる。(10a)のように語彙として歴史が古いと思われ、もはや略語形が定着してしまったものや、逆に(10b)のように最近の俗語性の高い略語の場合である⁹⁾。

- (10) a. botaN + mochi => botamochi/ *botaNmochi
 b. piNku + saroN => piNsaro
 hiyake + saroN => hisaro
 dotaNba + kyaNseru => dotakyaN
 gaijiN + tareNto => gaitare

2. 名前の愛称形・口語的変種など

2.1. 「～ちゃん」をとともなう愛称形

名前に「～ちゃん」をつける愛称形は、名前全体にそのままつけられる場合が一般的に見られるが(11a)、これは比較的親密でないか、フォーマルな印象を与える。より親密である形は、元の名前から2モーラをとる略語形を用いて形成される(11b)⁹⁾。(Poser 1984, 1990)

- (11) a. hanako => hanakochaN
 akira => akirachaN
 tomoko => tomokochaN
 makoto => makotochaN
 masao => masaochaN
 b. hanako => hanachaN
 akira => akichaN
 tomoko => tomochaN
 shuusuke => shuuchaN
 keiko => keichaN

この種の語形成において、長音化(12a)、促音化(12b)などが起こる場合があるが、これらと
 ならんで、モーラの鼻音の挿入も起こる(12c)。

- (12) a. hanako => haachaN
 yaeko => yaachaN
- b. michiko => micchaN
 sachiko => sacchaN
 mutsuko => mucchaN
 etsuko => ecchaN
- c. noriko => noNchaN (cf. > nokko)
 tsunemi, tsugumi, tsugiharu => tsuNchaN
 yuuna, yuuzoo, yumi => yuNchaN

これらの例はいずれも元の形から一部をとっているものの若干の変化をとともうが、それでも全体として2モーラとなっている。(12a)では最初の母音の長音化、(12b)は後続子音の重子音化であって、これら2つは周囲の環境の影響によるものである。これに対し例は少ないながらも(12c)のモーラの鼻音挿入は、1.1.節で扱った例のように独立して起こっているといえる。(12c)で挙げた元の名前の内、tsunemi => tsuNchaN, yumi => yuNchaN は元の語形に後続する鼻音の影響も無視できないが、他の例では、ほぼ周囲の環境によらないモーラの鼻音の挿入が見てとれる。

2.2. テレビタレントの愛称形

テレビタレントなどの愛称にモーラの鼻音が用いられている場合がある。テレビタレントの呼称という点から察するに、本人が勝手に自称したり、雑誌やテレビが宣伝の効果をねらっていたりなど、恣意的な発生である可能性も無視できない。しかし、長く親しまれ、一般に定着しているものが大部分であるということから、音韻的に好まれる語形であると考えられ、それゆえ、語形成における音韻的意味は十分にあるはずである。

- (13) a. (koizumi) kyooko (小泉今日子) => kyoNkyoN
 fukada kyooko (深田恭子) => fukakyoN
- b. (matsutooya) yumi (松任谷由実) => yuumiN
 (hosokawa) fumie (細川ふみえ) => fuumiN
- c. ucchaN naNchaN (ウッチャンナンチャン) => uNnaN/ *ucnaN/ *utsunaN/
 *uchinaN (ウッチャン<内村)

2.3. 親族名称の口語的変種など

2.2. で例示した、タレントの愛称形の場合に非常に似た例として、親族名称における口語的、俗語的語彙にモーラの鼻音が現れているものがある。

(14) Kansai dialect

- a. otoosaN => otoN
okaasaN => okaN
- b. ojisaN => ojiN
obasaN => obaN

これらの例は関西方言が発祥と思われるが、(14b) はすでに標準語として受け入れられているようである。その他の方言形として、仙台方言に次の例がある。

(15) Sendai dialect

- ojisaN => oNtsaN
obaasaN => baNtsaN

3. 強調的副詞など

音象徴語に接尾辞 -ri をつけて表される強調的副詞 (Davis 2000, Hamano 2000) は、基底形 (base) に対して次のように示される。

(16)	Base	Intensified adverb
a.	kote	kotteri
	bata	battari
	koso	kossori
	kichi	kicchiri
b.	dama	daNmari
	shimi	shiNmiri
	gena	geNnari
c.	shobo	shoNbori
	nobi	noNbiri
	jiwa	jiNwari
	huwa	huNwari
	boya	boNyari
	maji	maNjiri

Davis (2000) によれば、この語構成で強調を表す形態素は、浮遊する floating mora というもので、NO Long Vなどの制約によって (16a) のように無声子音を重子音化する。これが鼻音の場合も重子音化してモーラの鼻音が現れるが(16b)、その他の子音の場合も同様にモーラの鼻音が現れる(16c)。重子音の一部をなす促音の分布が、有声音の場合禁じられるなど音素配列的に制限されていることや、No Long V 制約が関わる日本語の音韻的性格からしても、モーラの鼻音が、強調のためのモーラを与えるのにもっとも好んで用いられていると
 ⑩。

他にも強調的に用いられているモーラの鼻音の例を挙げる。

- (17) a. uNzari
 taNmari
 b. buNnageru (< uchinageru)
 buNdoru
 huNdakuru
 c. sugoi => suNgoi
 tabi => taNbi (度)
 sonomama => sonomaNma
 onaji => oNnaji
 amari => aNmari

4. 漢字語に含まれる長音、モーラの鼻音

漢字語においては、複合語形成の場合に連濁は通常起こらない (18a)。連濁がみられる (18b) は、例外的であって、この場合の「醤油」「焼酎」「拍子」は、日本語化した漢字語と見られ、本来的な漢字語とは区別される (Haraguchi 2001) ⑩。

- | | | |
|---------|--|---------|
| (18) a. | kokusai ka <u>N</u> kei/* kokusai ga <u>N</u> kei | 「国際関係」 |
| | ke <u>N</u> ritsu kookoo/*ke <u>N</u> ritsu gookoo | 「県立高校」 |
| | yakiniku teishoku/*yakiniku deishoku | 「焼肉定食」 |
| b. | *sashimi shooyu/ sashimi jooyu | 「さしみ醤油」 |
| | *imo shoochuu/ imo joochuu | 「芋焼酎」 |
| | *te hyooshi/ te byooshi | 「手拍子」 |

また、(19a) のように、鼻音添加が起こることも通常なく、(19b) のような鼻音添加が起こることはむしろ少ない。

- | | | | |
|------|----|--------------------|-------|
| (19) | a. | oNiNroN/ *oNniNroN | 「音韻論」 |
| | | hoNyaku/ *hoNnyaku | 「翻訳」 |
| | b. | *kaNoN/ kaNnoN | 「観音」 |
| | | *teNoo/ teNnoo | 「天皇」 |

このように、漢字語の場合に「学校 (gakkoo < gaku+koo)」などの促音化を別にすれば、音韻交替はきわめて制限される。この制限に対し、漢字語に含まれる長音が、モーラの鼻音に置き換わる例がある。口語的語彙や、一部の方言的語彙、一種のニックネームなどである。

- | | | |
|------|--|-----------------------|
| (20) | choomage (?) => choNmage | 「丁髷」 |
| | shoobeN => shoNbeN | 「小便」 |
| | booya => boN/ boNboN | (cf. bocchaN 「坊ちゃん」) |
| | boosaN => boNsaN | 「坊さん」(Kansai dialect) |
| | toogarashi => toNgarashi | 「唐辛子」 |
| | toohokudaigaku => toNpei ⁽¹⁹⁾ | 「東北(トンペイ)」 |
| | tookyoojoshidaigaku => toNjo | 「東女(トンジョ)」 |

長音を含む漢字語について言えば、(21)で示すとおり、短音化する場合があるが(むしろ短音の方が普通であるものも多い)、一方、モーラの鼻音が含まれる漢字語の場合、そのモーラの鼻音が脱落することはまれであり、(22)で示すものがあるが、これらは極めて口語的である。⁽¹⁹⁾

- | | | |
|------|-----------------------|------------------------------|
| (21) | tsuuya => tsuya | 「通夜」 |
| | icchoomae => icchomae | 「一丁前」 |
| | saNshoo => saNsho | 「山椒」 |
| | aisoo => aiso | 「愛想」(cf. aisowarai, buaisoo) |
| (22) | daibuN => daibu | 「大分」 |
| | koNbu => kobu | 「昆布」 |

以上、(20)~(22)の現象から考えると、本来、音韻交替の少ないとされる漢字語において、長音回避の結果短音化される例(21)、モーラの鼻音に置き換わる例(20)などがある一方で、モーラの鼻音が回避される例(22)はまれであり、むしろ、モーラの鼻音は(20)のように挿入されるまでに好まれるものであるといえる。1節~3節での例と同様、この種

類の分析においても、モーラの鼻音を含む閉音節は安定度の高いものであると考えられる。

5. まとめ

以上、日本語のモーラの鼻音の、音節内での様々なふるまいについて分析してきた。このモーラの鼻音を含む音節は、それが入力にある場合、そのままの構造で出力に現れるか、全く現れないかのいずれかとなる傾向が非常に強い。これはすなわち、この種の音節は構造が損なわれにくいということである。また、モーラ数を保つ場合に、代償的な分節音挿入として、促音化、長音化にまさってモーラの鼻音が挿入される例を挙げた。これら、2つの点から考えて、モーラの鼻音を含む CVN 型の音節は、重音節の中ではもっとも安定度が高いものと言っていい。

ここからさらに考えるべき問題として、上の主張は言語相互間で普遍性をもつのかということがまず挙げられる。最適性理論の枠組みの中で、普遍性が高いとされている NO CODA 制約のことを考慮するとむしろ長音の 2 モーラ音節の方が最適ということになる。ところが、日本語に関しては、長音を回避する NO LONG V 制約も無視できない。大切なことは NO LONG V などの、ややもするとアドホックとみなされがちな制約に関して言語普遍性をさらに検討しなければならないということである。

さらに、音節の重さ (syllable weight) とモーラ、これらを考慮した上での音節構造についてのタイポロジーの研究成果もあり (Gordon 1997)、そういった研究も考慮して、普遍的な考察をさらに進めるべきである。

注

* 本論文は、日本言語学会第123回大会 (2001年11月17日、於九州大学) における口頭発表に基づいたものである。発表に際して貴重な意見を頂いた方々、特に平野日出征 (東北大学)、北原真冬 (山口大学)、上田功 (大阪外国語大学)、菊池清一郎 (東北大学) の各氏に感謝申し上げます。

- (1) “sunoboo” はかつてはない形であったが、すでに存在した “sukeboo” の影響で出現し始めたと推察される。
- (2) これに該当する例は、若年層の使用頻度の高い店名、メディアなど、極めて俗語性が高く、一般的にはまだ定着していないと考えられるものである。
- (3) Kubozono (to appear) の主な主張は /ai/ と /au/ の有標性に関することであって、/ei/ などの、他の二重母音との有標性の違いについては積極的には触れられていない。
- (4) maiseN の場合の語形成に関してはさらに考えるべき問題がある。
- (5) 「日本酒」のような漢字語の場合、漢字 1 文字ごとに形態的单位となる傾向が強いので、ここで取り扱うには若干不適切なのかもしれない。しかしながら、「日本」

を含む漢字語の略語形成では、「日米首脳 (<日本、米国)」「日赤 (<日本赤字)」など、「日」であるのが普通であるから「日本酒>日酒」とならないことからして、もはや漢字語としての感覚が薄いということもあるのかもしれない。さらに、poNshu を「本酒」と漢字表記しないことからしても漢字語としての認識は薄いと思われる。「日本女子大学>ボンジョ」も同種の例である。

- (6) 3モーラで実現される例がある。

deNki + buraNdee => deNkiburaN/ *deNkibura/ *deNbura

- (7) この種の略語は通常語頭から2モーラであるが、途中の音節を回避したり、語の途中の2モーラを取ったりする場合がある (Poser 1990)。

akiko > akochaN

wasaburoo > sabuchaN

- (8) Davis (2000) の他に、Davis & Ueda (2001, to appear) は、静岡方言の強調的形容詞について同様の分析を行っている。Davis (2000), Davis & Ueda (2001, to appear) のいずれも、最適性理論の枠組みを用いた分析において、*LV (no Long V), Dep-N (nasal) などの制約を与えたうえで、長音化、重子音化、鼻音挿入のいずれが起こるかは、これらの制約の違反状況によって選択されるとしている。

- (9) 連濁は通常大和ことばにのみ許されるとされる (Itô & Mester 1995: 819)。ただし、この箇所ですした「醤油」「焼酎」などの漢字語と並んで、「いろはがるた」 (<carta ボルトガル語) のような (古い次期に定着したとされる) 外来語の場合もあり、それらの語彙がどれだけ日本語化しているか (Japanized) について慎重に検討すべきである。

- (10) 「東」 (toN) の読みは、中国語からとも考えられる。(北京官話 東=dong')

- (11) 山陰方言で次の例がある。

haNbuN => haNbu 「半分」

daikoN => daiko 「大根」

参考文献

Davis, Stuart (2000) "The Phonology of Mora Augmentation," ms. Indiana University.

Davis, Stuart and Isao Ueda (2001) "Mora Augmentation in Shizuoka Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 10.

Davis, Stuart and Isao Ueda (to appear) "Mora Augmentation Processes in Japanese," *Journal of Japanese Linguistics*.

Gordon, Matthew (1997) "Syllable Weight and the Phonetics/phonology Interface," *BLS, General Session and Parasession on Pragmatics and Grammatical Structure*, 111-122.

Hamano Shoko (2000) "Voicing of Obstruents in Old Japanese: Evidence from the Sound-

- Symbolic Stratum,” *Journal of East Asian Linguistics* 9, 207-225.
- Haraguchi, Shosuke (2001) “On *Rendaku*,” 『音韻研究』 no. 4, 9-32.
- Itô, Junko (1990) “Prosodic Minimality in Japanese,” *CLS* 26, 213-239.
- Itô, Junko and R. Armin Mester (1995) “Japanese Phonology,” in: John A. Goldsmith ed. *The Handbook of Phonological Theory*, Blackwell Publishers Ltd, Oxford, 817-838.
- Kubozono Haruo (to appear) “On the Markedness of Diphthongs,” 『神戸言語学論叢』 no. 3.
- 桑本裕二 (1998a) 「日本語における複合語略語の音韻構造」 『音韻研究』 no. 1, 161-168.
- 桑本裕二 (1998b) 「略語形成からみた日本語の超重音節の構造について」 『言語科学論集』 no. 2, 25-35.
- McCarthy, John J. and Alan Prince (1995) “Faithfulness and Reduplicative Identity,” *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 18, 249-384.
- Poser, William J. (1984) “Hypocoristic Formation in Japanese,” *WCCFL* 3, 218-229.
- Poser, William J. (1990) “Evidence for Foot Structure in Japanese,” *Language* 66, 78-105.
- Suzuki, Hisami (1995) “Minimal words in Japanese,” *CLS* 31, 448-468.